

# 共同研究プロジェクト SME研究センター (中小企業の経営環境と経営革新) 〈中間報告〉

研究代表者 田中 則 仁

## 1 活動の現状

国際経営研究所の附置センターであるSME研究センターでは、中小企業の経営環境と経営革新をテーマとして、現在の中小企業が直面する課題を取り上げ、現状分析だけでなく政策提案を含めて発信することをねらいとした研究を継続している。

2021年4月、神奈川大学国際経営研究所がみなとみらいキャンパスに移転後も、継続して中小企業に関する懸案事項等を取り上げ、研究員がそれぞれの視点で活動をしている。その成果は、移転後の3年間で国際経営フォーラムに、畑中邦道客員研究員が3編の論文、小渕昌夫客員研究員が2編寄稿。亀山修一客員研究員はプロジェクトペーパーで2点を作成している。今年度は田中美和客員研究員がプロジェクトペーパーを準備中である。

今後とも最新の研究課題を整理して、SME研究センターのプロジェクトペーパーとして取りまとめ、その成果を公表すべく調査研究にも邁進していきたい。それらが刊行され掲載されたときには、研究者あるいは読者諸氏からのご意見やご指摘をお寄せ頂きたい。

## 2 研究の動向

SME 研究センターでの共同研究プロジェクトにおける調査と研究では、2020 年度以降の3 年ほど、現地への調査研究、集合しての研究会開催等には困難な時期が続いた。研究者によっては、現場に出かけての情報収集こそが研究の基本である分野も多い。本共同研究プロジェクトは、まさに中小企業の経営環境と経営革新であることから、企業訪問、現地調査という現場主義は欠かすことができない研究姿勢である。短期間企業に訪問し、現場を見たからといって全てが判るなどということではないが、現場を見て、担当者から実態を聞くことに優る情報収集はない。また、そこで得られた企業の実情が、どれほどの一般性と普遍性を持っているのか、あるいは例外的な事象であるのかなどの検証が必要であることは言うまでもない。企業に訪問し、現場の様子を経営者や担当者から直接面談調査することは、コロナ禍の緩和移行後、さらに進めていきたい。筆者自身も、意欲的な企業経営を実践している中小企業の経営者や工場責任者の方々、さらに、それら企業を支援している道府県の中小企業支援組織を訪問して、現場での活動を目の当たりにしてきた。先進的な取り組みを始めた新規の中小企業や機関への訪問、さらには、以前から継続的に訪問調査している中小企業や大学、企業に対する支援機関への定期的な訪問である。2023 年度も、地方都市への訪問調査研究を再開している。

## 3 継続研究の状況

### 地場産業の事例

継続的な訪問調査では、秋田県大館市の曲げわっぱ、有限会社栗久に訪問している。同社は、明治7 年の創業以来150 年の歴史があり、栗盛俊二氏は6 代目、現代の名工である。栗盛氏の実績で素晴らしいのは、ご自身の高い職人芸だけでなく、曲げわっぱを加工し成型するときに使用する、治具工具を自作し、それを地域の工房の職人にも提供していることである。自身で開発した技術や工夫は、とかく自社工房内で秘匿したがるもの

であるが、この力作の治具工具をむしろ積極的に提供している。同氏によれば、日用雑器としての曲げわっぱは、誰が作っても同じ仕上がりになるような治具工具の工夫が欠かせない。それを地域の工房で広く使用してもらうことで、曲げわっぱの市場が広まり、社会的認知が進むことが何よりも重要とのことである。70歳代の現在でも、全国各地のデパートなどに出向き、実演販売を継続している。

## 4 今後の研究計画

2023年度は、上記で紹介した通り、各研究員が随時その研究成果を発表してきた。今後は、新規研究対象と継続研究先の新たな挑戦の様子を所員や客員研究員が集い、研究会を通じて共有していくこと。さらに研究会での意見交換の中から、新規性や拡張性のある成果を発見して、公表していく努力が必要であろう。何らかの成功の秘訣やヒントが見出せるような、地道な研究の継続と僅かながらでも前進できる提案や提言を、共同研究プロジェクトの客員研究員と発信できることを期待している。そのためにも地域の重要な役割を担っている中小企業に焦点を当て、今後とも継続して調査し、研究を深めていきたい。SME研究センターの研究を進め、今後とも最新動向を調査し研究して取りまとめ、発信する予定である。